

2026年4月19日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教78「助け主なる聖霊」

詩編121：1～8、ヨハネ14：15～17

「あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」(15節) わたしたちが互いに愛し合うことは、イエスさまを愛することと無関係ではありません。「イエスさまを愛しているならば」これは一つの条件と捉えてもよいのです。イエスさまを愛していれば、わたしたちは互いに愛し合うことができる。逆を言えば、イエスさまを愛していないのであれば、わたしたちは互いに愛し合うことはできないということです。イエスさまを愛することができるか。そのことがわたしたちの愛の試金石になっています。

弟子たちはどうだったでしょう。イエスさまを愛していたか。口先ではなくて、十字架のイエスさまにどこまでも従っていったのでしょうか。この後、イエスさまが捕らえられた時に、弟子たちは誰も従うことができませんでした。ユダは裏切り、ペトロはイエスさまを三度も知らないと言ってしまいます。つまり彼らのイエスさまへの愛はもろくも崩れ去ったのです。誰もイエスさまを愛せなかった。十字架という汚れを引き受けることができなかった。元はと言えば、それは自分たちの罪の汚れであります。それをただイエスさまにだけ負わせて、見て見ぬ振りをする。そこにわたしたちの愛の限界が示されています。

「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。その方は真理の霊である」(16～17節) そのように愛せないわたしたちのためにイエスさまはここで「真理の霊」聖霊を与える約束をしてくださいました。それはイエスさまの十字架とよみがえりの後、ペンテコステの出来事において成就します。ここではその聖霊の役割が示されています。それは「弁護者」という言葉に表されていますが、以前の口語訳では「助け主」と訳しておりました。元の言葉ではパラクレートスという言葉です。「パラ」(側)と「クレートス」(呼ばれた)という意味の言葉が合わさってできた言葉です。つまり「側に呼ばれた」ということです。どうして側に呼ばれるのか。それは助けてほしいからです。わたしたちも困った時、手が離せない時「ちょっと来て！」と言うでしょう。自分一人では太刀打ちできない。だから誰かに来て助けてもらおう。聖霊はそのようにわたしたちの側に来て、わたしたちを助け導く働きをするのです。助けるとは、わたしたちをイエスさまに向かって助ける。イエスさまを愛することができるように助け導くということではないでしょうか。イエスさまを愛するならば、わたしたちは互いに愛し合うこともできるのです。それは完全に愛に破れたわたしたちにとってとても心強いことです。

けれども17節を見ると、「世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない」とあります。わたしたちはこの助けをまるで必要としていないかのように振舞うのです。助けが必要なのに、なかなか「助けて」が言えない。自分一人で解決しようとする。強がる。わたしたちもそういうところがあります。長老会でも、一人暮らしの方々への見守りをどうしようかという話をします。電話をする、訪問をする。できることはした方がいい。それもしないならば、それもまた「見ようとも知ろうともしない」こととなります。これは無関心ということでしょう。マザーテレサは「愛の反対は無関心」ということを言いました。結果、疎遠になる、そして愛せなくなる。わたしたちが関わりを断ち切り、孤立していく誘惑はこういふところにもあるのです。

そのようにして関係が希薄になり、人は孤立していく。自分が愛されていること、必要とされていることがなかなか見えづらい世の中です。先週は熊本地震から10年の節目の時を過ごしました。あの災害にどういう意味があったのかといろいろと思い巡らしておりました。熊本地震は災害関連死が多いことが特徴と言われます。地震そのものよりも、その後の生活によって健康が脅かされる。何人もの教会員の方々が住み慣れた熊本を離れていきました。そこでどうい生活をしてきたのか問題です。それがなかなか見えないのです。ある方は地震の後、全く教会に来られなくなりました。それまでは毎週欠かさず礼拝に来られていた。それが家から出られなくなった。しばらくはご自宅で過ごされておりました。引きこもってしまった。わたしも訪問して何度も説得しました。「一度、外に出てみましょう」と。けれどもとうとうその方は教会に来ることはありませんでした。その後施設に入られ、やがて天に召されました。人の心は複雑でなかなか分かりづらいところがあります。こうだろうと思っても、全く違う反応を示すこともあります。だからこそこちらがその心境を慮る。その心に寄り添う。あの地震は人間としての関わりの大切さに気づかせる出来事だったのかもかもしれません。

イエスさまは、このように「助けて」が言えないわたしたちのために、それゆえに無関心に陥っていくわたしたちのために、聖霊を与えていつも側にいてくださる。それは聖霊が勝手にすることではなく、わたしたちがそのように行動することを助けるのです。わたしたちが助けを必要としている誰かの側にいて助けることに、わたしたちを助けるのです。わたしたちもまたパラクレートス、側に呼ばれた者になるのです。考えてみれば、イエスさまこそパラクレートスでしょう。助けを必要としているわたしたち人間の側に来てくださった。まことの人として、わたしたちの悲しみや痛みに寄り添ってくださいました。そのイエスさまに結ばれて生きるわたしたちもまたそのように生きる者とされているのです。

先週は長崎に行ってまいりました。この4月より無牧師になりわたしが代務者として入ることになりました。少し遠いのですが、それこそ助けを必要としています。少しでも助けになればと思います。もちろんわたし一人ではありません。九州の仲間たちが全力で応援します。先日、牧師会の時にこの長崎教会の応援の話になりました。九州の長老派の教会の多くは長崎教会から生まれたのです。わたしたちの錦ヶ丘教会もそうです。長崎教会出身の教師、平山武知が派遣され、この熊本の地に初めて福音の種を蒔きました。鹿児島教会は瀬川浅が行きました。門司も唐津も佐賀も。ですから言わば長崎教会は「生みの親」です。ある牧師はわたしたちが今回無牧師の長崎教会を応援するのは「親の介護だ」と言いました。上手いこと言うなと思いました。でもみんなそういう気持ちで長崎に行く。パラクレートスなのです。聖霊に助けられ、わたしたちもそのように誰かのためにパラクレートスすることができる。誰かの側にいて助ける働きに押し出されていくのです。

天の父よ。愛することができない弱さを抱えています。だからこそあなたは助け主である聖霊を与えてくださいます。聖霊に助けられ、あなたを愛し、隣人を愛する生活に励むことができますように。助けを必要としている友がおります。その心に寄り添うことができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。